

学位請求論文審査報告要旨

2016年1月13日

申請者 呂美親

論文題目 日本統治下における台湾エスペラント運動研究

論文審査委員 星名宏修
安田敏朗
松永正義

1. 本論文の内容と構成

本研究は、日本植民地統治下の台湾エスペラント運動を「思想の媒介」、「社会運動の一環」、「文字改革運動の一環」、「普遍性の追求」の4つの視点から考察し、それが果たした歴史的役割を明らかにしたものである。

論文の構成は以下の通り。

序章

第一節 エスペラント運動史を考察する視点

第二節 人工言語のエスペラントとは

第三節 関連文献

第四節 論文の構成

第一章 台湾エスペラント運動の展開

第一節 日本エスペラント運動の概況

第二節 武装抗日時期における台湾のエスペラント移入

第三節 西来庵事件と台湾エスペラント学会

第二章 台湾エスペラント運動の隆盛と分裂

第一節 台湾エスペラント運動に取り組んだ在台日本人たち

第二節 ほかのエスペラント団体とその普及運動

第三節 台湾エスペラント運動の衰退

第三章 『La Verda Ombro』と『La Formoso』および『La Verda Insulo』

第一節 台湾エスペラント学会の『La Verda Ombro (緑の蔭)』(1919-1926)

第二節 台北エスペラント会の『La Formoso (台湾)』(1926-1930)

第三節 台南エスペラント会の『La Verda Insulo (緑の島)』(1933-1934)

第四章 プロレタリア・エスペラント運動への移行

第一節 1930年代初期の台湾：政治運動から文化運動へ

第二節 日本プロレタリア・エスペラント運動の台湾移入

第三節 階級闘争の手段として

第五章 言語・文字改革運動のなかにあるのエスペラント運動

第一節 日本と中国の文字改革運動のなかのエスペラント論

第二節 1920年代から1930年代の台湾文字改革運動

第三節 文字改革運動の一環としての台湾エスペラント運動

第六章 連温卿の「エスペラント主義」

第一節 「ホマラニスモ」と「国語」排斥

第二節 連温卿の「台湾話文観」

第三節 エスペラントから出発の台湾民族論

終章

第一節 台湾エスペラント運動の歴史的意義

第二節	文字・言語改革問題への示唆
第三節	台湾近代思想の基軸として
第四節	今後の課題
参考文献	

2. 本論文の概要

序章では、本論の問題意識やエスペラントが考案された歴史的な背景、また研究に関連する文献や先行研究、および論文の構成について述べている。

第一章では、明治末期から第二次大戦までの日本エスペラント運動を概観し、台湾の運動と関わったエスペランチストや関連する組織を論じている。

台湾各地で武装蜂起が相継いでいた 1913 年、三井物産の児玉四郎が台北支社に派遣され、『台湾日日新報』を通じてエスペラントの宣伝と普及運動を始めた。1915 年には、当時世界最大級のエスペラント教科書といわれた『組織的研究 エスペラント講習書』が台湾で出版されたが、同書の刊行直後に運動は勢いを失ってしまう。児玉が東京に戻ったことも影響しているが、同年に漢人による最大の武装蜂起「西来庵事件」が起こったことや、エスペラントを危険視した台湾総督府が監視の目を強めたことも挙げられる。

台湾島内の若い知識人が植民地政策に対して「非武装抗日運動」を模索し始めた時期に、エスペラントは新たな道を提供することとなった。1919 年に台湾エスペラント学会が台湾人エスペランチストを中心として創立されるが、これは台湾で最も早く設立された啓蒙運動団体である。1921 年の台湾文化協会設立に関わったエスペランチストも少なくなかった。1920 年前後に始まった非武装抗日運動は、エスペラント運動と深い関係を持っていたことが理解できる。

第二章では、在台日本人エスペランチストの運動を論じた。アナキストの稲垣籐兵衛は、日本内地の小坂狷二やエロシエンコらとの交流を深めるよう台湾人エスペランチストに促した人物である。また台湾神社の神官の娘であった山口小静は、東京在住時に山川均や山川菊栄から社会主義思想を学び、社会主義運動や女性運動に積極的に参加していた。病気のため台湾に戻り、台湾エスペラント学会に加入した彼女は、多くの社会主義に関する文章を機関誌に発表することで運動を左傾化させ、結果的に学会の分裂を招くことになる。

在台日本人エスペランチストの大部分—例えば台湾農業局参事の武上耕一や台湾専売局参事の杉本良、台北高等学校校長の甲斐三郎など—は、左傾化し台湾文化協会と関わりを深める学会とは距離をおくようになった。彼らは「台北エスペラント会」を結成して、1926 年に機関誌『La Formoso (台湾)』を発行した。学会とは訣別したものの、同会のメンバーは台湾のエスペランチストの代表として世界エスペラント協会に出席したほか、学术界や産業界、あるいは教育現場などさまざまな分野でエスペラントを広める活動を続けた。

1930 年代以降は、大本教や希望社など宗教および福祉団体も、台湾での運動を推進した。1931 年の台湾エスペラント大会の後、大本教のエスペラント普及会は「全島緑化運動」を行い、台湾各地に支部を設置する。台南エスペラント会の創設もそうした流れのなかにあった。この「緑化運動」によって、1930 年代初期の台湾エスペラント運動は、1920 年代初期と並ぶもう 1 つの最盛期を迎えた。しかし 1930 年代後半に皇民化運動や国語運動が強化されるにつ

れ、エスペラント運動は衰退し、自立的な普及運動はほぼ見当たらなくなってしまう。

第三章では、台湾エスペラント学会の『La Verda Ombro (緑の蔭)』、台北エスペラント会の『La Formoso (台湾)』、台南エスペラント会の『La Verda Insulo (緑の島)』など、台湾で発行された重要なエスペラント雑誌を分析した。

『La Verda Ombro』(1919-1926)は、全部で44号ないし45号刊行されたようである。雑誌の内容は、「国際事情とエスペラント運動の推進」、「台湾本島の民俗と社会時事」、「文学作品」、「科学知識」、「社会主義関連文章」の5つに分類できる。この章では同誌に連載された連温卿の「生蕃物語」、それと同じ内容が付録として再刊された「台湾先住民物語」を論じたうえで、雑誌の付録として発行されたエロシェンコの3篇の作品の掲載ルートを検討した。これによって植民地統治下の台湾人が同時代の中国知識人とつながるルートの1つとしてエスペラントが存在したことを明らかにした。

一方、在台日本人が中心となった『La Formoso』(1926-1930)は計14号が発行されたが、現在は9号しか確認できない。雑誌の内容は、「支部内部の交流や活動」、「エスペラントの語学やその重要性について」、「外国や日本内地の便り」、「在台日本人が見た台湾」の4種類に分けられる。『La Formoso』は左翼的な思想傾向を持たず、エスペラントの国際的な意義や実用性を強調する。在台日本人は、「他国語を尊重する」と言いながら、植民地の国語政策が台湾島内の言語を圧迫していた現状には目をつぶり、国語(日本語)を擁護しながらエスペラントを普及していた。とはいえ彼らにも台北在住者としての「郷土意識」があり、郷土=台湾を世界に見せようとする姿勢もうかがえる。

わずか2号しか刊行されなかった台南エスペラント会の『La Verda Insulo』(1933-1934)は、創刊号だけが現存する。発行者の王雨卿は台湾の昆虫学の研究に貢献した人物であるが、緑化運動の影響を受けて『La Verda Insulo』を刊行した。同会は左翼に批判的な内地のエスペラント普及会と密接な関係を持つ一方で、1930年代に流行したプロレタリア・エスペラント運動とも連動していたことが雑誌の内容から確認できる。

第四章では、1930年代以降の「プロレタリア・エスペラント運動」を論じている。日本のプロレタリア・エスペランチストであった比嘉春潮や小坂狷二、伊東三郎がどのように台湾に影響をもたらしたかを考察した。また台湾エスペラント学会の通信『Informo de F. E. S.』(1931-1932)と、教科書『Elementaj Lecionoj de Esperanto』(1932)を分析し、台湾プロレタリア・エスペラント運動の意義を論じている。

プロレタリア・エスペラント運動への移行は、内地の動きと連動するものであったが、1920年代初期に始まった学会の左傾化、つまり社会主義や階級闘争によって植民地政策に対抗する姿勢ともつながっていたのである。

第五章では、日本と中国のエスペラント運動を取り上げ、台湾エスペラント運動が日本や中国と同じように、言語・文字改革運動の一環として推進されたことを論じている。1920年代初期に始まった台湾の言語・文字改革運動が、東アジアにおける言文一致運動やエスペラント運動、さらにはローマ字運動、国字問題の議論などの流れに沿ったものであることを考察した。1920年代初期に初めて台湾語の近代化を提起したのは、エスペランチスト連温卿による「将来之台湾話」であった。民族と言語および社会の関係を論じながら、台湾語の語彙

や文法の整理について論じたものである。この提案は、1930年代の「台湾話文論戦」で具体化されることになる。台湾話文論戦は、1920年代に生みだされた「言文不一致」の台湾白話文を批判しつつ、「言文一致」にふさわしい文字や語彙の標準化の方策を議論したものであり、言語ナショナリズムの性格も帯びていた。この論争には、プロレタリア・エスペラント運動の影響も見ることができる。

第六章では、連温卿の「エスペラント主義」を論じている。連温卿が1905年の「エスペラント主義」を批判し、1913年の「ホマラニスム」こそ真のエスペラント主義だと考えたのは、植民地政策に起因する民族問題と階級問題を意識しながら社会運動を行っていたためである。連が主導したエスペラント運動は、植民地政策や日本帝国の資本主義がもたらした階級問題を批判し、1930年代にはプロレタリア・エスペラント運動へと移行した。

さらに本章では、エスペラントの視角から連温卿のナショナリズムを考察している。1920年代には、弱小民族の立場から植民地主義を批判するイデオロギーを形成しつつあった連温卿は、漢民族から蔑視されてきた先住民を台湾社会を構成する一つの民族とみなし、彼らを台湾の特殊性を示すものとして世界に向けて発信した。連温卿は左翼的な観点から、支配者である日本人に対峙する「台湾人全体」をプロレタリアナショナリズムとして構想するようになる。1940年代に発表された「台湾民族性の一考察」には、植民地政策への批判やマルクス主義的な要素も含まれているが、エスペランチストでもあった柳田国男の「一国民俗学」の影響も見てとれる。この時点の連温卿の「台湾民族論」の対象は、柳田の「一国民俗学」と同様に「一国」の「主要種族」である漢民族と漢化された平埔族に限定され、先住民は「台湾民族」の枠組みから排除されてしまうのである。

終章では、本研究を通じて得た知見を振り返りながら、日本統治期の社会運動や台湾近代思想史、または台湾文学や台湾の言語に関する研究に対して再検討が可能な点、そして今後の課題を提示している。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、日本や台湾のエスペラント雑誌をはじめ、これまでほとんど使われてこなかった資料によって、植民地期台湾のエスペラント運動史を系統立てて論述したことであり、これは本論文の大きな成果である。

第二に、これまで台湾人の非武装抵抗運動を論じる場合には、1920年に東京留学生が結成した新民会や機関誌『台湾青年』を嚆矢とすることがほとんどだった。しかし本論では、総督府の統治に不満を抱く台湾島内の青年が、通信教育という手段でエスペラントを学ぶことで、新たな抵抗の道筋を発見したことが論じられている。1919年に彼らが組織した台湾エスペラント学会は、新民会の成立より一年早く、21年の台湾文化協会でも連温卿らエスペランチストは重要な役割を果たすことになった。これは植民地期の社会運動像を更新する、非常に重要な指摘である。

第三に、主に1930年代の「帝都」東京で遂行された、日本人・中国人・朝鮮人・台湾人らの「国語」（日本語）を媒介とした文化的な抵抗運動については研究の蓄積があるが、エスペ

ラントによる抵抗のネットワークが存在したことを明らかにしたのも、本研究の重要な成果である。台湾エスペラント学会の『La Verda Ombro (緑の蔭)』は、200点以上のエスペラント雑誌と交換されていたといい、東アジアにとどまらない国際的な文化のネットワークを形成していたのである。

第四に、台湾のエスペラント運動を、日本と中国のさまざまな言語・文字改革運動（言文一致運動、国語国字問題をめぐる議論、ローマ字運動など）のなかに、これを位置づけようとした点である。

しかし、本論文には以下のような問題点がある。

第一に、それぞれの論は新たな資料を用いて調べられてはいるが、それらを統括する議論が弱く、二次資料による議論によった部分も多い。オリジナルな資料を使用しているものの、それに基づく議論を展開するだけの論が十分に示されていない点が散見される。

第二に、エスペラントの位置づけの問題である。エスペラントを通して見えてくるものが多岐にわたることは本論の貢献であるが、媒介としてのエスペラントの役割を強調したいために、やや恣意的な解釈がみられる。たとえば社会主義の影響にしても、著者の印象論の域を出ていない。また台湾社会全体を見渡してみれば、エスペラントよりも圧倒的に日本語経由でさまざまな思潮が流入していたはずである。全体像のなかにエスペラント過不足なく位置づけなければ、本質はみえてこない。

さらに、日本のローマ字論とエスペラント、そして中国のローマ字運動を一直線に結びつけようとしているが、これもかなりアクロバティックな議論である。たとえ結びつけられたとしても、それはきわめて細い線でしかない。本来考えるべきは、なぜ細い線でしかありえなかったのか、という点であろう。そしてまた日本のローマ字運動の多様性、中国のローマ字運動の多様性についても論の展開が弱く、全体のなかでの位置づけをおこなうという作業が十分になされていない。

第三に、資料解釈の問題である。たとえば、西来庵事件後に台湾総督府からの監視が強まった、という説を論証する場面で用いられる資料は、後年の回想と証言のみである。それによって「間接的な影響」があったというにしても説得力に欠ける。重要な論点を提出するのであるから、資料の博捜は不可欠である。

しかし、以上の弱点は著者も十分に理解しており、本論文の達成した成果を損なうものではない。今後の研究のさらなる深化に期待したい。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

論文審査委員 星名宏修
安田敏朗
松永正義

2015年12月17日、学位請求論文提出者 呂美親 氏の論文「日本統治下における台湾エスペラント運動研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、呂美親氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、呂美親氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。